

## 身近な医師の死

秋は学会に出かける機会の多い時期である。この時期になると、学会で上京の折信州の実家に寄る車中で、同級生と出会ったことが思い出される。私は大学の入学試験で彼と出会った。受験番号が1番で、私の列の一番前で試験を受けていたので、印象深い一人であった。

彼は、次から次へと繰り広げられる車窓の紅葉絵巻に一人見入っていた。彼とは卒業以来5～6年振りの邂逅であった。松本の学会に出張するところだと言って、再会を喜んでくれた。約1時間の車中での話題は、卒業した友達のことが主であった。

当時は、インターン制度が廃止され、卒業するとすぐ国家試験を受けることができたが、研修は自主研修という形で行われていた。私は内科・麻酔科を6ヶ月ずつ研修して、産婦人科の道を専攻していた。彼は卒業して静岡の研修病院で研修後、郷里の病院に赴任し、外科医として肺癌の研究に取り組んでいた。

同窓会には是非出席すると言って別れた。その後の彼の消息は、郷里の病院で肺癌研究会などを作って活躍していると聞かされていたが、会う機会はなかった。

昨年、卒業20周年の同窓会が行われた。既に、3人の同級生が亡くなっていた。彼が、3人の内の一人になるとは当時夢にも思わなかった。ニコッと笑った目と口元が魅力的で、患者さん達からとても信頼されていたという。4年前になるだろうか同級会の席で、彼が肺癌の手術を受けたことを知らされた。彼は肺癌の専門家で、自分で診断して東京から専門医を呼んで手術をし、経過は順調のようだと聞かされていた。ところがその2年後に、医師としての未練を残したままこの世を去って行った。雨の降る告別式に、同級生と参列した。多くの人達が彼の死を悼み、別れを惜しんだ。

病床から患者さんの診察に出かけ、倒れるまで自分の病氣と闘っていた姿を聞かされ、また死の間際に「チクショウ！」と言って死んで逝ったことを聞かされた。皆思わず目頭を押さえた。

自分の専門とする肺癌で自ら苦しみ、最後まで闘いながら死を迎えなければならなかったことへの<無念さ>が、「チクショウ」と言わせたのだと思う。脳への転移、放射線治療や化学療法での副作用と闘いながら治療に専念する姿を、多くの患者さん達も見ていたという。そんなことも構わず医師として最後まで生きたかったのであろう。

<医者の不養生>とよく言われるが、他にも具合が悪いのを隠し、自分自身で処方しながら痛みや苦しみに耐え、周りの人が気が付いた時には手術もできない状態でこの世を去って行った医師を何人も見ている。今、医師の中で自分の身体を気遣う時間的・精神的余裕を持てる人は少ないように思う。

医師としての未練を残したまま、奥さんや子供さんを残して去った身近な先輩医師や友の冥福を祈ってやまない。